



遠くの誰かを救う力

大田区立東調布中学校 三年 齋藤 暖耀

去年の冬、私はテレビの前で言葉を失った。令和六年一月に起きた能登半島地震で、家が崩れ、道路が裂け、人々が避難所で不安な日々を送っている映像が繰り返し流れていた。その時東京にいた私の所にも強く大きな揺れが届き恐怖に襲われた。さらに、復興も進んでいた頃の半年と約二ヶ月後の九月には、能登半島で記録的豪雨が起き、川が氾濫し、土砂崩れが起き、住宅が浸水し、命を落とす人もいた。私は再び言葉を失い、私にできることはないのかと深く考えさせられた出来事だった。同じ場所起きてしまった災害だが、考えていた私はある共通点に気づいた。それは、どちらの災害にも『税金』で支えられた支援があったことだ。能登半島地震では、自衛隊が出動し、倒壊した家の再建には「被災者生活再建支援制度」による補助金があり、被災者の生活の再出発に役立てられている。

ニュースで「家を建て直せるか不安だったけど、補助金のおかげで希望が持てた。」「避難所での生活が思っていた以上に過ごしやすく、環境が整っている。」と話す人達を見たとき、『税金』がただの「お金」ではなく、人々の安心やインフラの復旧を支えたりして人々の安全・安

心のために使われていることを実感した。

もう一方の能登半島の豪雨でも似たような状況をテレビで目にしていた。川が氾濫し、自衛隊がヘリコプターで家の上で手を振っている救助者を助け、安全なところに運んでいた。そして、避難所には食料や水、毛布や衣服などの生活必需品を届けたり、行方不明の人々を探したりしていた。また、流された家の再建には同じく「被災者生活再建支援制度」による補助金があり、被災地の生活の再出発に役立てられた。

ニュースを見ていた時、「この前の地震からようやく復興が進んでもとの生活が戻りつつあったのに今度は豪雨によってもとに戻されてしまった。」「地震と同じような思いをして、もう災害にあいたくない。」などといった声が多く、心配をしていた一方で、「補助金や自衛隊のお陰でインフラなどが整い、また安心できる。」などの声もあった。こういった話を聞いて、『税金』がただの「国会のためのお金」ではなく、誰かの命や人々の生活を支える手段であること再び実感した。

もうすぐ私は十五歳になるが、まだ『税金』を納める立場にない。しかし、今後『税金』を払う時が来た時には、災害はどこでも、誰にでもいつおきるかわからないからこそ、助け合いの精神を持つ社会の一員であるということを考え、思いやりを持って『税金』を払いたいと思う。

『税金』は、見えないところで人の不安や恐怖を希望に変えたり、人の命やこれからの生活を支えている。そして、私はこれから、その遠くの誰かを救う力の支え手の一人になっていきたいと思う。